

序にかえて

シャルル・バルバラ

— 発掘とその後 —

女子栄養大学教授 亀谷乃里

【学生教育】

1980年頃だったろうか。人間の脳も心もまだパソコン文明に汚染されていなかった。学生は自発的に旅行案内書を読み資料を探しフランス旅行の相談に來た。そもそも言葉とは意思疎通ができて初めて勉強の喜びが湧いてくるものである。フランス語でコミュニケーションを取りたいと思わせることが教育の始まりであった。いわずもがな、フランスは指折りの農業国であるから街角のあちこちに立つ市には近隣の農家の人たちが自分で作ったものを売りに来る。彼らとおしゃべりをするほど大学の学生に勉強になることはない。まず、話のきっかけを作てやる。すると学生は拙いフランス語をひと言ふた言発音する。コミュニケーションがとれ始めるとたちまち上達し始めるものである。つぎには、レストランで、メニューを読んで注文する。ガルソン（ボーイ）の協力と学生の熱意とでなんとか注文まで漕ぎつける。こんなことを数年繰り返すうちに参加学生の数も増え、万一事故に遭った時のことなども考えて、他大学を参考にフランス語研修旅行のルール作りをして正式に組織を立ち上げた。だが今では隔世の感がある。巷のバック旅行のようにすべてお膳立てをする方法は楽で効率的ではあるが、語学教育や文化の接触にはあまり適当ではないので、現在では自主研修を目指して学生に学校の申し込み方法やホームステイ先の選び方などを教えて自主的に研修をさせる方針をとっている。かつての学生のなかにはフランス語を必要とする会社に就職する学生もいたようである。今の授業のあれこれの結果がわかるのは10年も20年も先のことであろう。

【フランス文学研究】

三十年以上前のことに遡るが、シャルル・バルバラ（1817－1866）という作家の掘り出しをした。当時、バルバラは百三十年ほど闇に埋もれてしまい、文学史にも大部な百科事典にも現れず、その著書は古書店の隅にも見つけるのが難しかった。ただ詩人ボードレールとの関係でそちらに詳しい人だけがわずかにその存在を知のみだった。パリ国立図書館で読んでみると非常に音楽的要素の強い作家で、オリジナリティーに富むことも明らかだった。ところが発掘の手懸りがない。結婚証明書から出生証明書を見つけ、生年月日を確定する、というところから始めざるを得なかった bio-bibliographie をつく

り、作品論を書いているうちに、バルバラは、ロマン主義から現代に向かうターニングポイントをなす歴史的に重要な作家であることが次第に分かってきた。こうして博士論文（テーズ）に生涯と作品について詳述し、二つの作品と書簡等を付し公刊した。これは、『赤い橋の殺人』（1855）という探偵小説の先駆けをなす作品であり、暗黒小説であり、後悔の心理学で哲学的小説でもある。これはドストエフスキーが読んだと思われるほど『罪と罰』（1868）とよく似ている。もう一つはジュール・ヴェルヌの「気球に乗って5週間」に先立つサイエンス・フィクション、「ウィティントン少佐」（1858）である。バルバラはフランスでは認められた。作品の公刊後、私はテーズ、作品を含めてフランスで三冊を巷で刊行したが、暫くすると、幸か不幸か、私のテーズの重要な部分をそっくりとって要約し実に素晴らしいフランス語の序文をつけて『赤い橋の殺人』を出版した人がいた。けれども拙著の題名も私の名前も挙げてなかった。その後、電子書籍やプリントが無数の出版社から出て、註のついた誠実な作品も出、ウィキペディアも出、朗読もウェブ上で何種類か聴けるし、本は世界中の本屋で売られている。つぎには、アルフォンス・ドーデによる追悼文をそえた短編小説、シャルル・バルバラを主人公とした「黄金の脳みそをもった男の逸話」（『風車小屋だより』）がバカロレア（大学入学資格試験）の問題に出題され、その後『赤い橋の殺人』はグランド・ゼコール（高等専門大学）の準備コースの教授によって教科書版として単行本で出版され、今では、英語訳もKindleで読めるようになった。ただ日本でだけは出すのが非常に難しい。バルバラの情報が日本語ではほとんど巷に出回っていないからだ。翻訳は三十年も前からできているのであるが。「世界で初めて」ということの困難さをいやというほど思い知らされている。

これから退場であるが、本学ではこれまで研究の場を与えていただけたことを深く感謝したい。世界ではブレイクしつつはあるものの、私の力不足のため、文学史上、貴重なキーとなるバルバラという作家を、国内では在職中に広く知らしめることがまだできないでいる。文学は読まなければ評価され得ない。教職は退くが、研究とバルバラの周知に全力を尽くしたいので、どうか今後のご支援を切にお願いしたい。